

平成25年度岡山県農林水産総合センター農業研究所試験研究課題評価票

<事前評価>

総合評価凡例 5：優先的に実施することが適当 4：実施することが適当
 3：計画等を改善して実施することが適当 2：実施の必要性が低い
 1：計画等を見直して再評価を受けることが必要

課題名	マルチ栽培による「おかやま黒まめ」の高品質生産技術の確立						
課題の概要	大粒収量の向上や雑草防除の容易化が期待されるマルチ栽培について、その効果を明らかにするとともに、マルチ栽培に適した栽培・施肥技術を確立し、本県黒大豆の更なる高品質化と生産安定に資する。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	必要性	4人	1人	人	人	人	4.8
	有効性	1人	4人	人	人	人	4.2
	効率性・妥当性	3人	2人	人	人	人	4.6
	総合評価	4人	1人	人	人	人	4.8
助言・指摘事項等	<p>1 「おかやま黒まめ」は重要農産物の一つで、水田農業の基幹的作物でもあり、ブランドを維持するためにも、大粒を安定生産する技術の確立が望まれる。</p> <p>2 本課題のマルチ栽培については、一部地域で実施され、商品性の高い極大粒の割合が高まる事例があることから、栽培方法や施肥方法の開発によって収益性のさらなる向上が期待できる。</p> <p>3 研究の目的・課題が明確であり、研究計画もしっかりしていることから、当初の目的が達成できる可能性は高いと思われる。</p> <p>4 本栽培法ではマルチや肥料などの新たなコストがかかることから経済性の解析が重要となり、労働時間を含めた総合的な技術確立を期待したい。</p> <p>5 消費者や生産者は農薬をできるだけ使用しない栽培を望んでおり、本技術が確立すれば多くの農家が利用すると思われる。</p>						

課題名	県産ぶどうにおける消費者ニーズと販売形態の方向						
課題の概要	「ピオーネ」に対する消費者、小売り業者のニーズを把握・分析し、新たな消費需要に対応した販売形態を明らかにする。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	必要性	2人	3人	人	人	人	4.4
	有効性	人	4人	1人	人	人	3.8
	効率性・妥当性	人	3人	2人	人	人	3.6
	総合評価	人	5人	人	人	人	4.0
助言・指摘事項等	<p>1 近年、岡山では多くの品種が導入されており、消費者の嗜好も変化している傾向が見られる。岡山県のピオーネは国内シェア4割を占めるにもかかわらず、消費者実態調査が平成15年以降されておらず、本県のブランドの名を高めるためにも実態調査を早急を実施する必要がある。</p> <p>2 今後、ピオーネを県産ブドウ全体の中で、どのように位置づけて販売振興を図っていくのかという明確なビジョンを作成し、また、どういう顧客層に対してどういう形態で販売していくかなど、調査の狙いやターゲットをある程度絞って研究を遂行していく必要がある。</p> <p>3 厚労省の平成19年作成資料では、「果実消費が低迷している日本で60歳以</p>						

<p>上の高齢者は果物を最も多く消費し、その摂取量は青壮年層の約2倍」となっており、果物をあまり消費していない青壮年層の購入意欲を高める方策を検討すべきと考える。</p> <p>4 ピオーネは上品な甘さもち、進物用・家庭用と両用できる品種であるため、県外へPRし、認知してもらうことも重要と思う。</p>
--

課題名	「くだもの王国おかやま」の新たなブランディングを目指したイチゴ新品種の育成						
課題の概要	「モモの香りがするイチゴ」等の新たな特性を持ったイチゴ品種を育成し、県独自品種の果物を周年供給することで「くだもの王国おかやま」のブランド推進を図る。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	必要性	4人	1人	人	人	人	4.8
	有効性	2人	2人	1人	人	人	4.2
	効率性・妥当性	2人	3人	人	人	人	4.4
	総合評価	3人	2人	人	人	人	4.6
助言・指摘事項等	<p>1 イチゴ新品種の育成によって冬・春に独自品種が市場に投入できれば、年間を通じて「岡山産くだもの」の販売が可能となり、「くだもの王国おかやま」のブランド力アップに貢献できるものと期待できる。</p> <p>2 イチゴ栽培が衰退し、全国でも低レベルにある岡山のイチゴ産業を振興することは重要である。</p> <p>3 育種素材は既にいくつかあるので、限られた人員と予算の中で、効率的に目標とする品種の開発が進むことを期待する。</p> <p>4 「モモの香りのイチゴ」は想像がつかないが、他県の品種との差別化のために、桃の香りをセールスポイントとするのは着眼がよい。イチゴの岡山ブランド確立のため、新品種の育成に大いに期待している。</p>						

課題名	低コスト化を目指した促成ナスの炭酸ガス施用技術の開発						
課題の概要	液化炭酸ガスポンペを用いる生ガス施用方式は、装置が簡便でイニシャルコストは安い、ランニングコスト（ガス代）の高さが問題である。そこで、ランニングコストを低下できる生ガスの局所施用技術を開発する。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	必要性	3人	2人	人	人	人	4.6
	有効性	3人	2人	人	人	人	4.6
	効率性・妥当性	2人	3人	人	人	人	4.4
	総合評価	3人	2人	人	人	人	4.6
助言・指摘事項等	<p>1 これまでの試験で、日中の換気温度を上げ、かつ施設内の炭酸ガス濃度の高い時間帯を延ばすことで増収が認められたことから、より効率的な炭酸ガス施用技術を検討することは重要と考える。</p> <p>2 イニシャルコストが小さいCO₂ポンペを使用し、ランニングコストを抑えて効果の出る処理方法を確立し、実用化されれば、農家にとってはメリットが大きいものと思われる。</p> <p>3 普及に際しては経営規模別の費用対効果の分析も同時に行い、農家に対して説得力のある技術として開発して欲しい。</p>						

平成25年度岡山県農林水産総合センター農業研究所試験研究課題評価票

<中間評価>

- 総合評価凡例 5：優先的に継続することが適当 4：継続することが適当
 3：計画変更して継続することが適当 2：継続の必要性が低い。
 1：中止すべきである。

課題名	ブランド化を目指した「シャインマスカット」の高品質生産技術の確立						
課題の概要	産地間競争に打ち勝つため、他県をリードする高品質な「シャインマスカット」の生産技術を確立し、栽培マニュアルを作成する。						
評価結果	区分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成可能性度	2人	3人	人	人	人	4.4
	目標達成可能性(阻害要因)	2人	3人	人	人	人	4.4
	必要性	4人	1人	人	人	人	4.8
	有効性	3人	2人	人	人	人	4.6
	効率性・妥当性	3人	2人	人	人	人	4.6
	総合評価	4人	1人	人	人	人	4.8
助言・指摘事項等	<p>1 シャインマスカットのブランド化のために、高品質の房づくりの栽培技術を確立し、果皮の褐変障害の原因を解明し、防止法を確立したことは評価に値する。</p> <p>2 既に栽培技術を確立するとともにマニュアルも作成しており、当初の目標を十分に達成している。今後は、開発された技術がブドウ農家に十分浸透し、品質の均一なものが生産できるような体制を整備することが重要である。また、果皮の褐変や石ブドウといった果実障害については、その回避策を早急に確立する必要がある。</p> <p>3 シャインマスカットの農家の期待は高く、今後、全国的な生産量の増加に伴う価格低下が見込まれる中、相対的な有利性を確保できるよう、更なる高品質栽培技術の開発を期待する。</p> <p>4 高品質生産技術の開発ということであるが、シャインマスカットの「高品質」とは何を意味するのかを明確にし、その中身一つ一つをどのように改善するのかに関して、明確な方向性を示してほしい。</p>						

課題名	中山間地域に適した野菜新品種の育成・選定と品種特性を発揮させる栽培技術確立						
課題の概要	ブランド化推進に資するため準高冷地でも2tを超える耐暑性四季成り性イチゴ品種を育成するとともに、ジャンボピーマンでは青枯病耐性台木を選定し、その栽培技術を確立する。						
評価結果	区分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成可能性度	1人	3人	1人	人	人	4.0
	目標達成可能性(阻害要因)	人	3人	1人	1人	人	3.4
	必要性	人	2人	2人	1人	人	3.2
	有効性	人	2人	2人	1人	人	3.2
	効率性・妥当性	人	4人	人	1人	人	3.6
	総合評価	人	4人	人	1人	人	3.6
助言・指	1 イチゴ品種については、四季成り性の有望系統「Y」が作出され、準高冷地でも高温対策と施肥量の調整を行うことで安定生産できる技術を確立したことは意義深い。計画年度を待たずに平成25年度で前倒し終了すること						

摘事項等	<p>については理解する。なお、ピーマンの課題中止は、組織再編によるものであり、止むを得ないと判断する。</p> <p>2 よいイチゴ品種が育成されたと思うが、昨今の高温の影響でトマトなどが栽培が容易と思われ、「Y」の栽培希望農家が少ないことは仕方ないが、もっとアピールすべきである。</p> <p>3 開発されたイチゴ品種「Y」については、品種登録等をして他県へ販売していくなどの方策を検討する必要がある。</p>
-------------	--

平成25年度岡山県農林水産総合センター農業研究所試験研究課題評価票

<事後評価>

総合評価凡例 5：著しい成果が得られた 4：十分な成果が得られた
 3：一定の成果が得られた 2：見込んだ成果を下回った
 1：成果が得られなかった

課題名	発酵粗飼料に対応した水稻の品種選定と低コスト栽培法の確立						
課題の概要	専用品種に劣らない収量が得られる主食用品種とその栽培法を明らかにするとともに専用品種の特性を明らかにし、生産者が栽培条件に適した品種を選定できるようにする。また、たい肥利用を前提とした省力・低コスト・多収栽培法を確立する。						
評価結果	区分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	1人	4人	人	人	人	4.2
	有効性(効果)	1人	2人	2人	人	人	3.8
	有効性(目的以外の成果)	1人	4人	人	人	人	4.2
	効率性・妥当性(費用対効果)	人	5人	人	人	人	4.0
	効率性・妥当性(計画)	人	2人	3人	人	人	3.4
	成果の活用・発展性	人	5人	人	人	人	4.0
	総合評価	人	5人	人	人	人	4.0
助言・指摘事項等	<p>1 主食用品種のうち'ヒノヒカリ'と'アケボノ'は収量性、飼料成分、発酵品質などが優れること、つなぎ肥と実肥の施用により茎葉の収量が増大すること、穂肥の多用と実肥によりタンパク質含量が増加することなどを明らかにしており、当初の目標を達成している。</p> <p>2 水稻(主食用品種)を飼料に用いるのは、もったいない気がするが、飼料のほとんどを外国に頼り、減反するよりは、良い方法と思う。省力、低コスト、多収の栽培法を確立したことは評価に値する。</p> <p>3 3年間の研究として十分な成果が得られたと考える。直播栽培技術は、今後の低コスト稲作を追求する上で重要な技術であり、さらなる研究推進を期待する。</p> <p>4 研究の目的はまさに時宜を得たものである。現場での普及と実用化に向けた取組をさらに促進して欲しい。</p>						

課題名	生育阻害要因の解決によるビール大麦の高品質安定生産技術の確立						
課題の概要	ビール大麦の蛋白質含量と収量を不安定にしている生産現場の要因を調査し、その解決を図る。また、大規模化や降雨により播種時期が大きく変動することも収量、品質を不安定にする一因と考えられるので、作期に応じた後期重点型の施肥体系を確立する。						
評価結果	区分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	2人	2人	1人	人	人	4.2
	有効性(効果)	2人	2人	1人	人	人	4.2
	有効性(目的以外の成果)	2人	2人	1人	人	人	4.2
	効率性・妥当性(費用対効果)	1人	3人	1人	人	人	4.0
	効率性・妥当性(計画)	1人	3人	1人	人	人	4.0
	成果の活用・発展性	2人	2人	1人	人	人	4.2
	総合評価	3人	2人	人	人	人	4.6

助言・指摘事項等	<p>1 ビール大麦のタンパク質含有率は実肥の施用によって向上することを明らかにするとともに、12月以降の播種において安定生産を可能にする施肥方法とタンパク質含有率を適正化する葉色値の指標を明確にしておき、十分に目標を達成している。なお、同じ施肥でも年によってタンパク質含量が変動する点についての解析も重要と思われる。</p> <p>2 特に、葉色の値により、施肥の必要性を示す方法はわかり易く活用しやすい。</p> <p>3 開発された新しい技術の導入による経営的な有利性について、従来との比較データを明らかにすると、現場へ普及しやすい。</p> <p>4 生育阻害要因の一つである「排水不良」について、どのレベルまで排水不良を改善すれば、良質なビール麦の生産に結びつくのか説明が必要である。</p>
-----------------	---

課題名	消費ニーズによる岡山米の生産・販売方向						
課題の概要	岡山米の消費ニーズを把握・分析して、今後の生産・販売方策を県行政に活かすことによって、生産者の生産意欲や所得の向上を図る。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	人	3人	2人	人	人	3.6
	有効性（効果）	人	2人	3人	人	人	3.4
	有効性（目的以外の成果）	人	4人	1人	人	人	3.8
	効率性・妥当性（費用対効果）	人	3人	2人	人	人	3.6
	効率性・妥当性（計画）	人	2人	3人	人	人	3.4
	成果の活用・発展性	人	4人	1人	人	人	3.8
	総合評価	人	4人	1人	人	人	3.8
助言・指摘事項等	<p>1 岡山米に対する県外消費者の認知度が低いこと、県内消費者、米穀卸、および外食業者の消費や流通の実態などを明らかにしておき、当初の目標を達成している。今後の岡山米の生産・販売の方向性を決めるうえで役立つ成果と考えられる。</p> <p>2 米の消費が多様化している現在、本課題で得られた成果を今後どのように活用するかが重要であり、JAや普及と協力し、具体的方策を検討してほしい。</p> <p>3 ロットの確保が提案されているが、具体的にどのようにすれば、それを実現できるのか、また、流通の再編成が提案されているが、具体的に、どのような方向性をもって再編していけば良いのか、等に関して具体的提案があるとより望ましい。</p> <p>4 本研究成果を県産米のマーケティング戦略の策定にしっかりと反映できるように、引き続き成果の普及に努めることを期待する。</p>						

課題名	加温ブドウの省エネルギー化を図る変温管理技術の開発						
課題の概要	岡山県のブドウ加温栽培では、早期出荷と高品質化を狙った高夜温管理が一般的であるため加温期間中の燃料消費量が多い。このため、夜温を下げてでも生育遅延や品質低下が最小限に抑えられる新たな変温管理技術を開発する。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	4人	1人	人	人	人	4.8
	有効性（効果）	5人	人	人	人	人	5.0
	有効性（目的以外の成果）	1人	2人	2人	人	人	3.8
	効率性・妥当性（費用対効果）	5人	人	人	人	人	5.0
	効率性・妥当性（計画）	2人	2人	1人	人	人	4.2
	成果の活用・発展性	5人	人	人	人	人	5.0
	総合評価	5人	人	人	人	人	5.0

助言・指摘事項等	<p>1 ブドウの施設栽培は、労働ピークの分散や経営規模の拡大などメリットが多いが、近年燃料費の高騰が著しく、このため省エネ技術の開発が喫緊の課題となっている。このような中、早期保温と生育時期に応じた夜温設定により大幅な燃料節減を可能にする省エネ型温度管理技術を開発しており、3年間という限られた期間において、当初の目標を上回る優れた成果が生み出されたことを高く評価する。</p> <p>2 可能な限り早急に、一般農家への技術普及を望む。また、マスカットやピオーネ以外の加温ぶどうに関しても応用可能な技術開発を期待する。</p>
----------	--

課題名	ナス新台木系統の栽培技術の確立						
課題の概要	本県及び(独)野菜茶研が新規に育成した台木系統を用いた促成栽培技術を確立する。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	1人	3人	1人	人	人	4.0
	有効性(効果)	1人	2人	2人	人	人	3.8
	有効性(目的以外の成果)	1人	1人	3人	人	人	3.6
	効率性・妥当性(費用対効果)	2人	3人	人	人	人	4.4
	効率性・妥当性(計画)	1人	3人	1人	人	人	4.0
	成果の活用・発展性	2人	3人	人	人	人	4.4
	総合評価	1人	4人	人	人	人	4.2
助言・指摘事項等	<p>1 ナス台木'台太郎'の導入後10年以上が経過し、青枯れ病を中心とする連作障害の発生が懸念されるようになった現在、青枯れ病に抵抗性を有す新しい台木「ト-9」を育成するとともに栽培技術をほぼ確立し、障害発生時に対応できる体制をとっており、目標に到達している。</p> <p>2 当面はジーンバンクに保存と言うことであるが、「いざ必要」となった時に、台木(ト-9)の生産・供給体制は確保する必要がある。</p>						

課題名	スイートピーの落蕾多発条件の解明と落蕾抑制剤実用技術の確立						
課題の概要	落蕾が多発する条件を明らかにするとともに、落蕾抑制活性を持つアミノレブリン酸、トレハロース等の利用法を確立する。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	1人	2人	2人	人	人	3.8
	有効性(効果)	2人	1人	2人	人	人	4.0
	有効性(目的以外の成果)	1人	4人	人	人	人	4.2
	効率性・妥当性(費用対効果)	1人	4人	人	人	人	4.2
	効率性・妥当性(計画)	1人	2人	2人	人	人	3.8
	成果の活用・発展性	3人	2人	人	人	人	4.6
	総合評価	人	4人	1人	人	人	3.8
助言・指摘事項等	<p>1 スイートピーの落蕾の原因を解明し、落蕾抑制に対する長日処理や1-MCP処理の有効性を明らかにしており、当初の目標を達成している。</p> <p>2 1-MCPは、既にリンゴやカキなどで使用可能であり、農薬登録に向けて早急に準備する必要がある。</p> <p>3 長日処理に関する技術を開発し、農家へ普及して欲しい。</p>						

課題名	有機栽培における持続的な土壌管理技術の確立						
課題の概要	有機野菜栽培において、養分集積が起こっている圃場での土壌管理対策と、養分集積が起こらない施肥方法の確立を目指す。						
評価結果	区 分	5 点	4 点	3 点	2 点	1 点	平均点
	目標達成度	1 人	4 人	人	人	人	4. 2
	有効性（効果）	1 人	3 人	1 人	人	人	4. 0
	有効性（目的以外の成果）	2 人	2 人	1 人	人	人	4. 2
	効率性・妥当性（費用対効果）	1 人	4 人	人	人	人	4. 2
	効率性・妥当性（計画）	2 人	人	3 人	人	人	3. 8
	成果の活用・発展性	3 人	2 人	人	人	人	4. 6
	総合評価	1 人	4 人	人	人	人	4. 2
助言・指摘事項等	<p>1 得られた成果は情報発信が大変重要であり、現場の農家に、正確な情報が伝わるよう工夫していただきたい。</p> <p>2 長期の有機栽培により、土壌成分の過剰や塩基バランスの悪化が起こるため、持続的な土地管理システムを構築することは重要である。</p> <p>3 有機認証資材の肥効特性や塩類集積圃場の発芽不良対策としての点滴灌水の有効性を明らかにし、また養分過剰圃場におけるカリウム欠乏に対して有機栽培で利用可能なカリウム資材を開発するとともに、水稻の有機育苗における鶏ふんの利用法を実証しており、目標に到達している。</p> <p>4 有機栽培に関する研究は、中長期的視点に立った地道な取組が重要であり、引き続きフォローすることを期待する。</p>						